

「オンラインツールと私たちの暮らし」

# つながり方の新しいカタチ

コロナ禍で、急速に利用が進んだオンラインツール。新しい技術を活用しながら、人とのつながりも大切にしていけるには、どのような視点が必要なのだろうか。



LINE・アプリを学ぶ講座で講師（右）からスマートフォンの操作を学ぶ参加者（左）

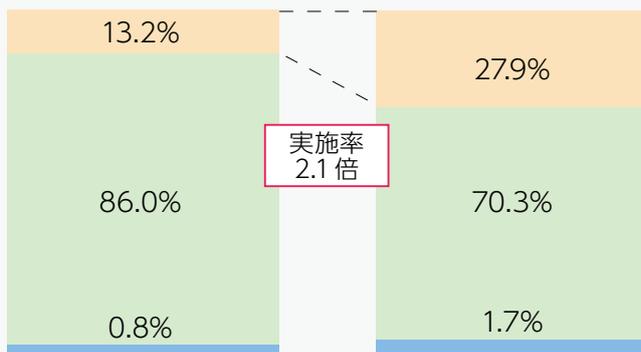
テレワークの実施状況から見る

オンライン化の流れ

インターネットに接続したパソコンやスマートフォンなどで簡単に会議や研修などを遠隔で行えるアプリ、いわゆるオンラインツールは今、どのように使われているのだろうか。新型コロナウイルスの拡大は、私たちの生活に大きな影響を与えた。イベントなどが集まる場づくりは、感染リスクの高さから自粛が相次いだ。事態の長期化により、会社に行かずに仕事をする「テレワーク」が急速に進んでいる。

総務省が発表した「令和3年情報通信白書」によると、感染症の拡大後、テレワーク実施率は大幅に増加（グラフ）。一定の定着傾向にあるとの結果が出ている。感染症対策のみならず、執務場所の確保や移動時間の短縮など仕事の効率化にもつながるため、適さない職種があるなど課題はあるものの、急速に導入が進められている。市内でも、コワーキングスペースの設置やオンライン講座の開催など、新しい働き方や社会参加の方法が広がっている。

離れて暮らす家族や友達と直接会う機会を奪ったコロナ禍。困難な時期を過ごしたからこそ「人とつながる」ことの大切さを、より強く感じている人も少なくないのではないだろうか。特集では、オンラインツールを「人とつながりを保つ手段」として提案。体験談や市の支援体制を紹介する。



- テレワーク実施者
- テレワーク非実施者
- 対象業務自体なし

(グラフ)従業員のテレワーク実施率

パーソル総合研究所「第四回・新型コロナウイルス対策によるテレワークへの影響に関する緊急調査」から筆者作成（総務省「令和3年情報通信白書」から引用）

オンライン化ってなに？

言葉の意味と市の取り組み

【オンラインツール】  
ウェブ会議システムの代表的なアプリに、Zoom・Teams・Webexなどがある。

【DX】  
デジタルトランスフォーメーション（DX）は、2004年にスウェーデンの大学教授によって提唱された概念。

●進化したデジタル技術を浸透させることで、人々の生活をより良いものへと変革すること

●既存の価値観や枠組みを根底から覆すような、革新的なモノやサービスをもたらすもの

【島田市のDX】  
▽令和元年11月27日に「島田市デジタル変革宣言」を発表。市民サービス・地域産業・行政経営の3分野で、デジタル変革に取り組んでいます。

【島田市デジタル

トランスフォーメーション推進計画】

目指す将来像

誰もがデジタル技術を活用し、安心して快適に暮らせる新しい社会

施策の柱▼①市民サービス ②地域・産

業 ③行政経営

※詳しくは、QRコードから市ホームページをご覧ください。



DX 推進計画

行政のDXを知る

行政のDXとは、デジタル技術を使い、住民本位のより良い行政サービスを提供していくこと。デジタルは、あくまでも手段の一つであって、目的ではないのです。全ての人がデジタルを活用できるように、学びの支援を行っています。

例えば、デジタルに苦手意識を持ちやすい高齢者。スマートフォンなどからインターネットが使える、それらを活用したサービスを使えるようになるれば便利ですね。そのために、スマートフォンを楽しみながら使ってもらえるよう、スマートフォン講座などを開催しています。

一方で、オンライン施設予約や地域情報提供システム「島田市わが街ガイド」などを公開。今まで市役所に来なければできなかったことも、インターネット上で自分で調べたり、手続きができるようになりました。サービスの周知など、まだやるべきことは多いですが、順を追って進めていきたいと思います。



デジタルトランスフォーメーション推進課 係長 松井 邦晃 36-7969

自治会 X DX

市内で初めて、Zoom組長会を導入した河原町自治会。会長の平口さんに、体験談を語ってもらいました。

「市からオンライン組長会を提案されたときは参加者が数人しかいないのでは、と思っていました。しかし、組長にアンケートを実施すると、半数近くがZoomでも良い・教わりたいとの回答があったんです。思いの外、生活に浸透しているなと感じました。そこで、コロナ対策で2回に分けていた会議を1回に集約。半数は、オンライン参加としました。選択肢が広がることで、仕事などで時間に間に合わなかった人が、参加できるようになりました。」

河原町自治会長

平口 政男さん



Zoom 組長会の様子

私自身は、使い方がよく分からず困ることがありました。逆に、組長の中には詳しい人や既に使っている人もいました。実施には、事務員さんの助けも大きかったですね。  
パソコンが得意な身近な人の存在は、分らないことが出るたびに相談ができ、とても頼りになりました。デジタルに尻込みする人には、メリットを伝えること。子どもや孫など、若い人に手伝わってもらえばできると、提案すれば良いと思います。取り組みを通して、デジタルは選択肢として選べるのが利点だと感じました。一方で、人と人が触れ合い、助け合うことも、大切にしていきたいですね」

市移住定住ポータルサイト

「住んで島田」

市内の生活環境や不動産情報、イベント情報など、移住に関するさまざまな情報を発信。

- 島田の気候・立地・魅力など
- エリア（学区）別の紹介、不動産バンク、移住支援金など
- 就業・起業支援
- 地域コミュニティ・FAQ など
- 子育て支援施策・教育・保育
- お知らせ（イベント情報など）
- 移住者ブログ

【移住者ブログ】

島田市での実際の暮らしや移住のメリット・デメリットを、インタビューやブログ形式でリアルにつづり、移住経験者・市内在住者の「生の声」をお届け。

【オンライン移住相談】

ミーティングアプリ「Zoom」を利用した、オンラインによる移住相談を個別に開催。

- 随時開催（事前予約制）
- 相談会（月1回・事前予約制）

※詳しくは、QRコードから市移住定住ポータルサイト「住んで島田」をご覧ください。



住んで島田



移住定住ポータルサイト「住んで島田」の画面

付いたことがあります。人の良さ、地域住民との程よい距離感や、生活圏にある海・川・山のバランスのとれた自然などです。移住を考えている人には、気軽に相談会に申し込んでほしいですね。一方で、昨年実施した移住調査では、身近な人からの口コミが一番の安心材料になるという結果も出ています。市内に住んでいる人は、ぜひ友達や市外に住む家族に、島田の「良いところ自慢」をしてもらえたらと思います。

市民協働課 ☎36-7197  
柿本春奈 事務員

人に寄り添い、支援する



## 移住定住 X DX

オンライン相談に参加し、市内に移住したマーティン杉山さん一家。体験談を語っていただきました。

「子どもの小学校入学を機に、アメリカから実家のある静岡県内への移住を考え、相談しました。初めは、コロナ禍での移住や子どもが学校に馴染めるかなど、心配事も多かったです。でも、オンライン相談を通して、歓迎の雰囲気や画面越しにも伝わってきました。実際に川根へ見学に行き、小学校でも快く迎えてもらえて、安心して移住を決めることができましたね。

オンラインツールは仕事で使い慣れていたのですが、メリットの方を多く感じました。特に、遠くにいてもすぐに相談できた点が良かったです。移住後は、地域の方と話をしたり、英会話教室を開いたり、人と接することを大切に過ごしています」

川根町家山に移住  
杉山さとこさん  
ヘンソン・マーティンさん

専門家に聞く!

### オンラインツールのススメ

▽市と自治会との連携協定により、Zoomの導入支援などを行う企業の川井さん。自治会で講座を行った際の話や、活用方法を聞きました。

「自治会向けの講座で、初めに参加者の関心の強さを感じました。その後の組長会では、オンラインにすることで参加者が発言がしやすくなった例もありましたね。

活用方法には、会議や研修、講演会などの場面もあります。また、遠くにいる人とながれるのも、魅力の一つではないでしょうか。

活動を通して、デジタルの時代でも、人と人とのアナログ的なコミュニケーションが大事であると感じました。地域住民のDX推進は、1つの組織だけでは成立しません。市・自治会・民間企業の3者が連携することで、課題を解決していきたいと考えています」



(株)TOKAIケーブルネットワーク

川井 実法さん

## オンラインツール

は、コロナ禍の社会に

おいて、人と関わる上で有効な手段となる。しかし、画面上で全てが完結するわけではない。その後、続く対面での触れ合いを通し、人と人がつながったり、その大切さを考えるきっかけになれば良いのだと思う。

新しいことを学ぶことは、気力や体力がいることだ。だからこそ、学びを楽しむ気持ちが必要になる。教える側が子どもや孫であれば、親や祖父母に教えることで、新しい会話のきっかけにもなるかもしれない。そうして人と人とながれることで、生きやすさや、より豊かな生活につながる。

新しい生活様式の浸透とともに、コミュニケーションにもデジタル技術の活用が定着しつつある。オンラインツールは、遠くにいる人とも簡単に顔を見て話ができる。内容によって、一時的に使う場合やオンラインで完結する場合もある。選択肢が増えた今、場面によって手段を変え、使い分けることが、これからの社会で生きる私たちに必要な「つながり方の新しいカタチ」ではないだろうか。

## つながり方の新しいカタチ

